

令和元年6月25日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02016

研究課題名(和文) 応用倫理学の基礎論的研究

研究課題名(英文) Basic Research on Applied Ethics

研究代表者

大石 敏広 (Ohishi, Toshihiro)

北里大学・一般教育部・教授

研究者番号：20442494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、環境問題を解決するための政策において人々は一致できるかどうかという問題について考察し、日常生活の視点から自然の問題を考えていくことの重要性を明らかにした。第二に、重なり合う合意という考え方について考察し、日常における価値の多様性という視点から、環境プラグマティズムにおける政策の合意の概念を明確にした。第三に、副次的な研究として、日常言語と哲学の関係について考察し、日常言語に即して倫理問題の解決を目指していくべきことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、学術論文の出版や学会発表によって、現在あまり議論されていない応用倫理学の基本的な問題について学術的に議論することの重要性を示すことができた。第二に、研究全体の報告書を出版し、倫理学を専門としない人たちに対する講演を行った。その際に、一般の人たちにも理解できるようにできる限り分かりやすい記述を心がけた。これによって、本研究を、専門を超えて広く応用倫理学について議論するための契機とすることができた。

研究成果の概要(英文)： First, I discussed whether people can agree on the policy for solving environmental problems, and clarified the importance of considering natural issues from a daily-life perspective. Second, I examined the idea of a overlapping consensus, and elucidated the concept of policy concurrence in environmental pragmatism from the perspective of diverse values in daily life. Third, as a secondary study, I analyzed the relationship between everyday language and philosophy, and suggested that we should try to solve ethical problems using everyday language.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：応用倫理学 技術者倫理 環境倫理学 政治哲学 環境プラグマティズム 日常言語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の研究動向について次の2点を指摘することができる。

第1に、J・ファン・デン・ホーベンは、応用倫理学の方法論として、「工学モデル」、「原理主義」、「パティキュラリズム」の3つを挙げている(“Computer Ethics and Moral Methodology,” 2000)。「工学モデル」は、抽象的で普遍的な道德原理の適用により判断・行為を正当化することで倫理問題の解決をもたらそうとする考え方である。「原理主義」は、個々の専門分野に応じた特殊な道德原理の適用により判断・行為を正当化することで倫理問題の解決をもたらそうとする考え方である。「パティキュラリズム」は、抽象的で普遍的な道德原理の適用ではなく、歴史の特殊な事例や特定の状況との結びつきの中で判断・行為を正当化することで倫理問題の解決をもたらそうとする考え方である。

第2に、技術者倫理(工学倫理)の分野において、工学の設計問題と倫理問題の関連性に注目すべきだという主張がある。これについては、C・ウィットベックの考察が最も重要である(“Ethics in Engineering Practice and Research,” 1998)。国内の業績として重要なのは、齋藤了文の諸文献である(『ものづくりと複雑系』1998年、等々)。しかし、それがどのような関連性なのかについては明確にされてこなかった。特に、両者に関連性があるという主張は、倫理問題を設計問題として理解しなければならないということの意味するのか、それとも倫理問題を工学の設計問題とのアナロジーから理解しなければならないということの意味するのかが明確ではなかった。さらに、そのアナロジーとは具体的にどのようなものなのかも問題となる。

私はこれまでの研究によって、応用倫理学の方法論として、第2の工学の設計問題と倫理問題の関連性に着目する主張に重要な論点があるということ、その関連性は両者のアナロジーを意味するという、そのアナロジーが具体的にどのようなものかということをも明らかにしてきた。私は、そのアナロジーを「設計的思考」と名付けた。

さらに、私は、科学技術の問題について考えていく過程で、「双方向的コミュニケーション」という方法の重要性について学んだ。「双方向的コミュニケーション」は、社会において生じている科学技術に関わる問題を解決しようとする過程で注目されてきた方法である。問題解決を科学技術の専門家に任せきりにするのではなく、多様な価値観を持っている問題関係者全員が協働して、双方向的なコミュニケーションを通して合意を目指して問題を解決していくことが必要となる。そして、こうしたやり方が、科学技術の分野のみならず、環境倫理学における問題の解決にも有用であることを理解した。

そこで、第1に、本研究によって、以上の過程を経た現段階として、設計的思考と双方向的コミュニケーションに基づく実践的方法論に関する諸考察をさらに新たな分野へと拡張し、これによって、研究をさらに強固なものにしていくことを目指した。これまでの研究は、技術者倫理(工学倫理)・環境倫理学の分野に関連したものであった。そこで次に、政治哲学の分野における方法論の問題へと研究を進めていった。今回は、J・ロールズの方法論を取り上げた。ロールズの方法論の内実について考察し、私のこれまでの研究とロールズの方法論の比較検討を行い、これまでの研究の修正・補強に努めた。

第2に、本研究において、研究成果の内容を1つにまとめ、それを、一般人(公衆、非専門家)に分かりやすく提示することを目指した。応用倫理学の方法論はそもそも、現代社会において生じている問題を解決するための実践的方法論である。現代社会に生じている問題に直面しその解決を必要としているのは一般人であり、問題の解決には一般人が重要な役割を果たすと考えられる。従って、まずもって一般人に応用倫理学の方法論を理解してもらう必要がある。

2. 研究の目的

倫理学には、メタ倫理学、規範倫理学、応用倫理学という3つの分野がある。応用倫理学は、規範倫理学において構築された倫理学理論を応用して、ある特定の分野における倫理問題を解決していくための学問分野であると一般的には考えられている。

これに対して、私はこれまで、倫理問題の解決方法に応用倫理学の独自性があり、その応用倫理学の方法論は逆に、倫理学そのものの在り方に転換をもたらすものであるということをも明らかにしようと努めてきた。本研究の目的は、これまで行ってきた応用倫理学の方法論についての研究成果をこれまでに考察した分野とは別の分野に適用してその方法論の有効性を確かめ、これまでの一連の研究成果を1つのまとまったものへと総括することである。

3. 研究の方法

本研究は、次の手順で行われた。

(1) 設計的思考と双方向的コミュニケーションに基づく実践的方法論の妥当性を、環境倫理学の問題を通して確認する。

(2) 設計的思考と双方向的コミュニケーションに基づく実践的方法論を、政治哲学という新たな分野における問題と関連させて、この実践的方法論の修正・補強をする。

(3) 一般人も含めた広範な人々による議論のための叩き台とするために、研究全体を理解しやすい形で1つにまとめていく。

4. 研究成果

平成 27 年度の研究成果

(1) これまでの研究をもとに、環境倫理学の重要問題である「人間中心主義と非・人間中心主義の対立」に関連したテーマについて考察した。このテーマは、環境倫理学の分野において極めて重要なテーマであり、これまで多くの人によって議論されてきたものである。しかし、その議論が、どのような結論に至ったのかは明確ではなかった。本研究では、設計的思考と双方向的コミュニケーションに基づく実践的方法論の視点からこのテーマについて考察し直した。

(2) 上記(1)の考察をもとに、「ブライアン・ノートンの収束仮説と説得の倫理学」という論文を執筆した。この論文では、政策は一致するという収束仮説を手掛かりに、自然の内在的価値を認める非・人間中心主義と、それを認めない人間中心主義の対立について考察し、自然の問題の解決における日常生活の視点の重要性を明確にした。

(3) 本研究に基づいた講演をすることによって、専門外の人に应用倫理学の重要性について考えてもらう場を設けることができた。

平成 28 年度の研究成果

(1) ロールズの「重なり合う合意」という概念とその修正概念を手掛かりに、環境プラグマティズムにおける重要概念である「政策の合意」について考察し、「環境プラグマティズムにおける政策の合意の概念について ロールズの重なり合う合意を手掛かりに」という論文を執筆した。この論文では、日常生活における多面的な価値の対立の中で、哲学、倫理学を引き入れた形での公共的議論によって政策の合意を目指すべきことを主張した。

(2) 学会発表を通して、環境問題の解決における環境プラグマティズムの重要性について議論する機会を作ることができた。

平成 29 年度の研究成果

(1) 数人の研究仲間と、*Environmental Pragmatism* (edited by Andrew Light and Eric Katz, 1996)の翻訳を開始した。これは、環境プラグマティズムの古典中の古典であり、極めて重要な文献である。

(2) 本研究の副次的研究として、日常言語と倫理と哲学の関係についての考察も開始した。それに基づいた講演を行い、一般の人に、科学技術と哲学の関係について考えてもらう場を設けることができた。

平成 30 年度の研究成果

(1) 引き続き、*Environmental Pragmatism*の翻訳を行った。現時点では、監訳者による翻訳原稿のチェックが行われている。

(2) 日常言語と倫理と哲学の関係についての考察に基づいて、学会発表や講演を行い、専門外の人や一般の人に、倫理問題を考える際の倫理や哲学の重要性を理解してもらうきっかけとなることができたと考える。なお、現在学術誌に、「外的世界の懐疑論と日常言語の超出」という論文を査読結果に基づき修正し再投稿している。

(3) 本研究の全体を一冊の報告書にまとめ、出版した。一般の人が読んでも理解できるようにできる限り平易な記述を心がけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

大石 敏広、「環境プラグマティズムにおける政策の合意の概念について ロールズの重なり合う合意を手掛かりに」、「倫理学研究」(関西倫理学会) 査読有、第47号、2017、pp. 123-134

大石 敏広、「ブライアン・ノートンの収束仮説と説得の倫理学」、「倫理学年報」(日本倫理学会) 査読有、第65集、2016、pp. 249-263

〔学会発表〕(計2件)

大石 敏広、「パトナムの实在論と真理の概念」、日本科学哲学会、2018年10月14日、立命館大学(京都市)

大石 敏広、「環境プラグマティズムの方法論とロールズ=ハーバーマス論争」、関西倫理学会、2016年11月5日、慶應義塾大学(東京都)

〔図書〕(計1件)

大石 敏広、総合印刷会社ケーエスアイ、「応用倫理学の基礎論的研究」、2019、114

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕（計 4 件）

大石 敏広、「私は、自分に手があることを知っているのか？」、沖縄哲学ワークショップ・第 4 回公開講演会、2019 年 3 月 19 日、アゴラ（沖縄県那覇市）

大石 敏広、「哲学の謎：私 とは何か？」（修正版）、沖縄哲学ワークショップ・第 3 回公開講演会、2017 年 3 月 5 日、アゴラ（沖縄県那覇市）

大石 敏広、「哲学の謎：私 とは何か？」、オーサーズカフェ、2016 年 3 月 26 日、相模原市立市民・大学交流センター（神奈川県相模原市）

大石 敏広、「語り得ぬこと とトランス・サイエンスの問題」、北里大学・第 15 回一般教育部セミナー、2015 年 5 月 25 日、北里大学（神奈川県相模原市）

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。